



人間の目から見ればごく普通のため池でしかない小友沼だが、よほど渡り鳥の中継地に適していたということか。鳥たちが各地から集まってきて各地に散っていく…、さながら、渡り鳥の“ハブ空港”である

JR東能代駅から真南に約1.5kmの小友沼は、藩政時代に長い年月をかけて造成された人造のため池である。

現在でも能代平野の耕地を潤すかんがい用水の供給で重要な役割を担っている。耕作シーズンが過ぎるとため池としての務めも終え、干潟同然の様相になり、明春までしばし静寂のひと時を過ごすのである。

…と、言いたいところだが、小友沼には冬にももう一つ大きな仕事が待っている。それは、渡り鳥への“ねぐら”の提供だ。初冬、シベリアから南下してきたマガンやヒシクイなどの小型の渡り鳥が、小友沼でしばし羽を休め、周辺の水田でエサを求め、元気をつけて更に南の越冬地にふたたび飛び立っていくのである。

小友沼を渡りの中継地とする鳥は、数万羽から最大で10万羽にも及ぶ。

沼の上空がしらじらと明け始める頃、眠りから目覚めた鳥たちの鳴き声がギャーギャーとにぎやかに沼を埋め尽くす。そして、朝の散

歩にでも出かけるように、一斉に飛び立つ。その羽音のすさまじいこと！ 決して誇張ではなく、まさに空港に着陸しようとしているジェット機の轟音に似ている。一見一聴に値する渡り鳥の乱舞だ。

2月の下旬頃からは、北に帰る渡り鳥たちがふたたび小友沼に集まり始める。来る時と違って帰る時は「仲間で誘い合う」のか、小友沼をしばしのねぐらとする渡り鳥の数はさらに増える。

早曉の鳥たちの乱舞は一瞬のことなので、見なければ暗いうちから現地に着いていなければならず、（私を含めて）早起きの苦手な人にはつらいけれども、眠いのを我慢してでも見ておく価値があるのではないだろうか。

地球温暖化の影響か、これ以上の南下をせず小友沼にとどまる渡り鳥を見ることもあるという。小友沼が渡り鳥たちの“ひいきの中継地”であり続けることは、地球環境の一つのバロメーターなのだ。

夜明けの乱舞